ペトルーシュカ

新交響楽団
第28回定期演奏会



PETROUCHKA

The New Symphony Orchestra 28th Subscription Concert

指　揮　芥川也寸志
Conductor　Yasushi Akutagawa
ピアノ　渡辺　達
Piano　Tatsu Watanabe

I　交響曲第8番　ヘ長調　作品93……ルードヴィッヒ・ヴァン・ベートーベン
Symphony No. 8 Fmajor Op. 93……Ludvig van Beethoven
(1770－1827)

第1楽章　アレグロ　ヴィヴァーチェ　エ　コン　ブリオ
1st Mov.　Allegro vivace e con brio

第2楽章　アレグレット　スケルツァンド
2nd Mov.　Allegretto scherzando

第3楽章　テンポ　ディ　メヌエット
3rd Mov.　Tempo di Menuetto

第4楽章　アレグロ　ヴィヴァーチェ
4th Mov.　Allegro vivace

II　弦楽のための三楽章……芥川也寸志
"Triptyque for String Orchestra"……Yasushi Akutagawa
(1925－　)

第1楽章　アレグロ
1st Mov.　Allegro

第2楽章　「子守歌」　アンダンテ
2nd Mov.　"Berceuse" Andante

第3楽章　プレスト
3rd Mov.　Presto

●・◆・●

III　舞踊組曲「ペトルーシュカ」……イーゴル　フェオドロヴィッチ　ストラビンスキー
"Pertrouchka"……Igor Feodorovich Stravinsky

第1場　謝肉祭の市場――手品師――ロシア舞曲
1er Tab.　Carnaval――Le tour de passe-passe――Danse russe

第2場　ペトルーシュカの部屋
2ème Tab.　Pétrouchka

第3場　ムーア人の部屋――ムーア人の踊り――ワルツ――
3éme Tab.　Arap――Danse de la Ballerine――Valse――
――ペトルーシュカの出現とムーア人との喧嘩
――Apparition de Pétrouchka et la querelle d'Arap avec Pètrouchka

第4場　謝肉祭の日の夕方――乳母の踊り――農夫の笛と態の踊り――
4ème Tab.　Grand Carnaval――Danse des Nounous――L'ours et un Paysan jouant du chalumeau――
――ジプシー女の踊り――駆者と馬丁の踊り――
――Le marchand et les Bohémiennes――Danse des Cochers――
――仮面の踊り――ムーア人との喧嘩、ペトルーシュカの死
――Les Déguisés――La querelle et le mort de Pétrouchka

ペトルーシュカ

新交響楽団
第28回定期演奏会
1974年2月5日(日)午後2時
東京文化会館大ホール

——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志

Yasushi Akutagawa



1925年　東京生まれ。
1949年　東京音楽学校研究科作曲部を卒業。
作曲を伊福部昭氏、指揮を渡辺暁雄氏に師事。
＜作品＞交響三章、トリプティク、交響曲第１番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、オペラ「広島のオルフェ」、チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート 他。
＜著書＞音楽の現場、私の音楽談義、音楽を愛する人に、音楽の基礎、音楽の遊園地。

新響創立以来の常任指揮者、毎週土曜日に殆んど欠かさず新響を振るその情熱は、「アマチュアには、アマチュアらしい、プロには絶対にない素晴らしさがなければならない。スポーツの世界にも通じるような、練習に練習を重ね、ただひたすらに自分たちの音楽を追求しようとする純粋な心。これにのみ支えられた輝くアマチュアリズムがなければならない」という信念に支えられているといえましょう。
現在、作曲活動のほかにヤマハ音楽振興財団の専務理事として新しい音楽教育システムづくりを企画するなど、多忙な生活を送られています。

——ピアノ——

渡辺　達

Tatsu Watanabe

9頁、団員のプロフィール参照

アマチュア初のストラビンスキー３部作一挙演奏

——新交響楽団第２９回定期演奏会——

曲　　目　舞踊組曲「火の鳥」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ストラビンスキー
舞踊組曲「ペトルーシュカ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ストラビンスキー
舞踊組曲「春の祭典」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ストラビンスキー
指　　揮　芥川也寸志
日時・会場　昭和50年６月１日７時　渋谷公会堂　　**入場料**　S：1000　A：800　B：500(全席指定)

曲目解説

交響曲第8番　　ベートーヴェン

ベートーヴェンという名を知らない人は、赤ん坊を除いてこの地球上に存在しないのではないかと思われる程、その名はあまねく知れわたっています。なぜこれ程までにベートーヴェンという名が周知のものとなったのでしょう。それは言うまでもなく、彼の創り出した音楽が偉大であったからにほかなりません。彼は人類に多くの素晴らしい遺産を残してくれました。作曲家ベートーヴェンは、作曲家としては他の追随を許さない位の功績を残したのです。芸術作品は、一旦作家の手元を離れ社会に送り出されれば、それはそれとして作家の人格や日常性とは別個のものとして人々と対面し評価されるべきものです。しかし私達はここで、日常人としてのベートーヴェンがいかなる人であったのかを一瞥してみるのも無意味ではないと思います。なぜならば今日演奏される第8番を含めて数々の名作は、ベートーヴェンという一個の人間が創作したものにほかならないのですから。

偉大な作曲家ベートーヴェンは、日常人としてはほとんど生活破綻者と言って良い位ひどいものだったようです。特に対人関係におけるベートーヴェンは、まるで子供みたいです。例えば「無作法で、人眼をかまわず、頑固で、きびしくて、時にはまるで感覚がなくなったかと見えるほど茫然としているかと思えば、そばで堪えられなくなるほど騒々しくなる。あるいは突然毛を逆立てて怒り出す。しかもたいていはその怒りは誤解の結果である。しばしば節度を超えて肺腑をえぐるような響きを持つ皮肉や冗談を言い、面白がって哄笑する時は、聾特有の不快な高声で馬のように笑う。教養と節制の与える微笑の幸福というものを全然知らない爆笑するような笑いである。その笑い方は、人に憐憫と不快を催させる笑いである。」（「ベートーヴェン」長谷川千秋著）という風です。このようなベートーヴェンが周囲の人々のひんしゅくをかい、ゲーテをして、「ベートーヴェンは悪いことに、実に手におえない野人なのだ。彼は、もちろん世の中の人々から嫌われても平気だが、それは彼と世間の人々とを気持ちよくする方法ではない。彼は許してやらねばならない。何となれば彼は聾だ。」と言わしめたことも故あることと思わざるを得ません。紙幅の関係上、日常人ベートーヴェンの演じた数々の滑稽とも思える悲喜劇を紹介できないのが残念です。しかしベートーヴェンは日常人として自分に足りない点の一切の弁明を、自分の芸術にさせようと思ったのでした。そして彼は自己の全生命を創作活動に注ぎこみました。私達はその成果の一つを今日、新響の演奏を通じて享受することができるのです。

第8交響曲は1812年10月に完成されました。第7交響曲と相前後しています。人気は第7交響曲に集中しましたが、ベートーヴェン自身はこう言っています。「(第8交響曲が) 人気がないのは、まさにこっちの方がはるかに秀れているからだ。」と。全体は4楽章から成り、過度にならない程度に明るく、落ちつきとユーモアに満ちています。

1楽章は全管弦楽によって力強く始まりますが、その力強さは最後まで貫かれており、曲は整然とした構成のもとに築きあげられています。

2楽章は軽快で歯ぎれよいリズムによって主題が奏される明るく楽しいスケルツォです。それはベルリオーズをして、「これまでのどんな作品もこの曲の手本とはなり得ず、又この曲に匹敵する作品もありえない。芸術家の心にそっくり完全な形で天から降ってきたような作品だ。」と言わしめた程絶妙な楽章なのです。

3楽章はメヌエットです。メヌエットはフランスで発生した優美典雅な踊りとその音楽のことですが、ベートーヴェンのこのメヌエットも素朴な美しさを宿しています。

4楽章は第8交響曲の中では一番激しさを持っている曲で、リズムが変化に富んでいるのが特徴です。激しさの中にもユーモラスなものは失なわれておらず、彼の生命力の躍動をききとることができるようです。

新響 “鯨” 特別演奏会

日　時　1975年4月23日(水)　午後7時
会　場　文京公会堂
曲　目　「フィガロの結婚」序曲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・モーツァルト
　　未完成交響曲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・シューベルト
　　レクイエム・・・モーツァルト
指　揮　芥川也寸志　　**独唱**：未定
入場料　未　定

弦楽のための三楽章「トリプティク」　芥川也寸志

芸術作品を鑑賞する場合に共通して言えることでしょうが、特に明確な意味づけの困難な音を素材として創りあげられる音楽においては、頭で理解するということよりも、元来心で感ずべきものだろうと思うのです。頭だけで理解したと感じても、ほんとうにその音楽をわかったことにはならないだろうと考えるからです。音楽は、それを聞く人が、それを聞くことによって、少しでも生きている幸福を味わうことができたならば、それだけで充分その存在価値が認められると思います。ですから、音楽を聞こうとする人が、その曲を創作した作曲家の精神と、その人なりに、人間と人間としてのふれあいを求めるのであれば、なまじな曲目解説を読むということは益あることとは思われません。音楽を聞く前に解説を読むと、私達はついその説明にとらわれてしまいがちだからです。芥川也寸志も、その著作である「音楽を愛する人々に」の後書において次のように記しています。「総じて日本人は何事によらず解説好きのようですが、音楽においてそれはとくに顕著にあらわれています。これは長い間にわたって培われてきた民族的な日本音楽と明治になってから輸入された西洋音楽とが、本質的にはまったく異なった基礎の上に立っており、かって有効であった音楽的な知識や技術や美感さえもまるで無効になってしまい、西洋音楽にふれようと思えば、すべてをまず知性的に解するところから始めなければならず、そのためには解説がどうしても必要であったという歴史的な条件があったためと思われます。」さらに「適切な解説はときによって多少はその助けになるかも知れませんが、多くを望まぬ方が安全といえましょう。頭で音楽を理解しようとすれば、＜理解した＞と思ったときには実に音楽から遠く、＜理解できない＞と感じたときこそ音楽に近いところにいるという矛盾が生じるからです。音楽を、音楽以外のものでわかろうとする態度はあらためて申すまでもなく滑稽なことであります。」音楽と人間の関わり合いということの原点にたちかえって考えてみると、芥川也寸志の説くところは、まさに正論と言わなければなりません。学校教育において、又テレビやラジオ、レコード等において西洋音楽の日本における普及状態を考えると、日本のクラシック音楽愛好家の人々の耳は、聞こうとする音楽について言葉により、あるいは文字によりなされる解説から与えられる予備知識なしで、それを鑑賞するに足る基礎が備わっているのではないかと考えます。さらに今日これから演奏される「弦楽のための三楽章」は我国の作曲家芥川也寸志によって作曲されたものですから、私達はそれを聞くときに欧米製の曲に接したときとは違った、どこか日本的ななにかを感じとることができるのではないかと思います。音楽は心で聞かなければ意味がありません。

幼少の頃、芥川也寸志はストラヴィンスキーの「火の鳥」「ペトルーシュカ」を好んで聞き、東京音楽学校(現芸大)で伊福部昭に師事した結果、ストラヴィンスキーからは、その特色であるアクセントのきいた強烈なリズムや色彩豊かで華やかなオーケストレーションの感化を受け、伊福部昭からは感情に耽溺せず、冷静に計算しつくして音楽を構成する姿勢を学びとりました。冷静に計算された音楽というと、機械的で冷たい音楽らしからぬものを想像しがちですが、これは音楽に文学的意味づけを持たせないで純粋な音そのものを組み合わせて巧妙に創作していくということなのです。以上のことからわかるように芥川也寸志の音楽の特質は、アクセントの強いリズム、対位法という音楽上の技法を見事に駆使して創られた精巧なおもしろさ、それに個性的なメロディーにあると言えるでしょうが、最大の長所は楽器の特性をよく心得えて生かしている点にあるでしょう。この弦楽オーケストラのための作品「トリプティク」にも弦楽器(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)の個有の音色が生かされ、弦のみのひきしまった世界を築きあげているのです。

副題につけられた「トリプティク(三連画――三枚続

入場無料

APA会員による室内楽をあそぶ会

日　時　12月18日(水)　6時半
会　場　新宿・金属健保会館ホール
(出演者が自ら費用負担して行う演奏ですので、演奏の質については保証しかねます。オーケストラと異ったリラックスムードの室内楽をお楽しみください。)

《主催》日本アマチュア演奏家協会(略称APA)設立準備会



国鉄新宿駅東口より徒歩10分
地下鉄新宿三丁目駅より徒歩5分
都バス新田裏バス停前(日赤産院前)
東京都新宿区西大久保1丁目392－4
TEL　208－5211(大代表)

曲目解説

きの絵画――)」が示すように、曲は三つの楽章から構成されており、発刺としたリズムに支えられています。

1楽章は小刻みのリズムを持つアレグロ、2楽章は子守歌と題されたアンダンテ。この楽章ではメロディーが朗々と歌われ、又楽器を手で軽くたたいて出す音も楽音の一つとして取り入れられており、やさしい慰めに満ちた曲です。3楽章は日本的なリズム（日本の祭り太鼓のリズム）が用いられた小気味よいプレスト楽章です。全体にさっぱりした味わいが漂よっている秀でた作品と言えるでしょう。

舞踊音楽「ペトルーシュカ」　　ストラヴィンスキー

1830年代のある暖かい日のことです。帝政ロシアの首都ペテルブルグでは謝肉祭が華やかに行なわれていました。通りには手廻しオルガンが聞こえ、回転木馬や旋回すべり台、シーソーなどが用意されお客を呼び合っています。様々な催し物やいろいろな見世物小屋も立ち並び町は賑やかにごった返しています。そして見世物小屋の一つに人形芝居の小屋がありました。物語はここから始まります。芝居小屋の人形使いは人々が集まると人形に生命を与え、芝居を始めます。この物語の主人公ペトルーシュカは、恋の相手であるバレリーナ及び恋敵のムーア人と共に生命をふきこまれます。この三人の登場人物達が織り成す三角関係がこのバレーの中心であり、物語は展開されます。

第一場　謝肉祭の市場

曲はフルートで演奏される謝肉祭の雑踏を思わせる旋律によって始められます。それは気ぜわしく、うかれた街のざわめきが伝わってくるようで、いかにもお祭り気分にふさわしいものです。人々が陽気にはしゃぎ、出店の並ぶ道を歩き、時には立ち止まって店の中をのぞいていく、又ある時は店をひやかしながら通っていく人々の姿が目に浮かぶようです。その上次々に変わる拍子が謝肉祭の混雑した情景描写をより効果的にしていると言えるでしょう。やがて場所は人形芝居小屋に移り、人形使いが登場してフルートを吹き始めますが、このフルート独奏の部分は人形たちに生命を吹きこむ場面を描写していて、少しもったいぶった不思議な雰囲気の漂う部分です。すると生き物となった人形たちはムックリ起き上がり、勢いよくロシアのダンスを踊り出すのでした。

第二場　ペトルーシュカの部屋

どういうわけなのでしょう。ペトルーシュカは人形使いによって自分の部屋へ放りこまれます。第二場の冒頭は見事にその様子を描写しています。ペトルーシュカは人形使いを呪い、悲しんで何とかして部屋を出ようとしますが、どうにもなりません。そこへ日頃から恋こがれているバレリーナがはいってきたので彼は今がチャンスとばかり胸の思いを必死で打ち明けました。ところがペトルーシュカの真剣は気持ちなど嘲って、彼女は全く取り合いません。バレリーナは何事もなかったように部屋を出て行ってしまい、あとに取り残されたペトルーシュカは可愛想にすっかり落胆してしまいました。

第三場　ムーア人の部屋

さて、ペトルーシュカを袖にしたバレリーナは椰子の実にたわむれながら一人で踊っているムーア人の部屋に現われますが、ムーア人は彼女のことなど一向に気にとめません。今度はバレリーナの方が無視されたのです。そこで彼女は何とかムーア人の気をひこうと気どって踊り始めます。やっとバレリーナに気づいたムーア人は彼女に興味を覚え、二人は呑気にワルツなど踊り出しました。すると突然トランペットがけたたましく鳴り響き、嫉妬に怒り狂ったペトルーシュカが飛びこんできたのです。さあ大変です。ペトルーシュカとムーア人はお互いの自尊心と名誉にかけてバレリーナをめぐって激しい争いを始めました。バレリーナはただおろおろするばかりです。ペトルーシュカはたたかいに負け、外に追い出さ

＜こばなし＞

N響にきていたチェロのヒューブナーさんはウィーンでよくお年寄のアマチュアの合奏相手をさせられたという。ある高官の宅での話、ヒューブナー氏曰く、「閣下、このテンポだと全曲終るのに夜が明けてしまいますが。」この高官ひげをなでながら、「ベートーベンもずい分長い曲を書いたもんじゃね。」

（右より）　さしあたりやるべきことは三声部よりも、それこそ三連音符といった三枚目的訓練の三味です。

＜三重奏とは＞（ＡＰＡ会報より）

三者三様などといいますが、いわば三原色が三位一体となり、ときに三権分立するところに三重奏があるわけです。しかし三角関係が往々にして三竦みであるように、たんなる御三家で三拍子そろうというものでもありません。三重奏は三人で。だが三声部とは限らない。三和音を三回鳴らしても、三拍子になりませぬ。三連音符が三つなら三拍だけれども、三重奏とは関係ない。ほんの三段論法の遊び。（左へ）

れてしまいました。

第四場　謝肉祭の市場（夕方）

第四場は第一場と同じ場面にかえり、やはり雑踏の風景描写で始まりますが、時はすでに夕方になっています。太陽もすでに傾きかけ強烈な夕日に映える市場では残り少ない楽しい日を心むくまで味わい尽くそうとするかのように人々が酔いしれ踊り狂っています。熊を連れた農夫の踊り、ジプシーや行商人の騒ぎ、仮面をつけた群衆の踊りなどが続き、謝肉祭は頂点に達します。その真最中刀を持ったムーア人に追いかけられたペトルーシュカが小屋の中から飛び出してきたので広場は騒然となります。ペトルーシュカは死にもの狂いで逃げますがついにつかまり斬り殺されてしまいます。それを目撃した人が警察を呼んできますが、人形使いは、殺されたのはおがくずのはいった人形にすぎないことを説明し、死体を小屋の中へ引っぱって行くと、芝居小屋の屋根にうらめしそうなペトルーシュカの幽霊が現われるのでした。

以上のように町の目抜き通りの広場での事件を題材にしたこのバレー音楽の中においてストラヴィンスキーは、ロシアの民謡や民族音楽を盛りこみつつ、各情景や心理描写を音によって巧みに斬新に表現しており、それは私達を実際にその場に居合わせているかのような錯覚に陥いらせるほどです。この作品は、ストラヴィンスキーのもっとも優れた作品の一つとして人々に愛され続けていくでしょう。

「ペトルーシュカ」は１９１１年６月１３日、パリのシャトレ座で初演されました。ストラヴィンスキーは、このバレー音楽の原曲とも言うべきものを、最初ピアノとオーケストラのための一種の協奏曲風の作品として企図していたのです。ところが、ロシア・バレー団のマネージャーで名興行師であったディアギレフがストラヴィンスキーの滞在先を訪れた際、彼にそれを聞かせたところ、ぜひバレー音楽に仕上げてくれと懇願されたのです。ストラヴィンスキーは承諾し、出来上がったのがこの「ペトルーシュカ」だったわけです。彼はこの音楽の作曲中に次のようなイメージの幻をみたと伝えられています。それは「突然生命を与えられた人形が、悪魔的なアルペッジョの奔流で管弦楽の腹の虫を爆発させるありさまを頭に描いた。管弦楽が今度は脅迫的なトランペットの吹奏でこれに応酬する。その結果は、ついに絶頂に達して、あわれが人形の可哀想な意気消沈に終わる恐ろしい騒音である」（自伝より）というものです。この幻影は完成された作品の中に見事に反映されていると思われます。又、このバレーの台本も、ブノアの協力を得てストラヴィンスキー自身が作成しています。そして「ペトルーシュカ」という題名については、主役である人形の個性を適切に表現するものとして、どのような名をつけるべきか、作曲者自身大いに頭をしぼったようで、「ペトルーシュカ」という名に思い致った時には、踊り上がって喜んだということです。若き作曲家（ストラヴィンスキー当時29才）の創作風景を彷彿とさせます。

「ペトルーシュカ」は「火の鳥」につぐ作品で、ストラヴィンスキーの初期の傾向を代表する三部作の一つです。この曲は１９１０年の「火の鳥」の作曲後に着想されたのですが、着想としては次作「春の祭典」よりも少しおくれています。「火の鳥」よりも民族主義的傾向が強くなり、心理描写の手腕も大いに発揮されています。

「火の鳥」のオーケストレーションは確かにその色彩感覚に、これまでとは違った新しい可能性を見出した作品ではありましたが、まだ師リムスキー＝コルサコフの影響などが強くみられ、真に作曲者の個性が表出したものだとは言い難い点があります。それに比べると「火の鳥」の翌１９１１年に作曲された「ペトルーシュカ」こそは、ストラヴィンスキー独自の新しい音の世界をかなり顕著に表現した最初の作品ということができるでしょう。

（上野学園大学　西村はるみ）

＊　　＊　　＊

音楽クイズ

次の文字は何と読むのでしょう（解答9頁）

1．痺臼
2．半。
3．雁
4．舌炉

マユツバ音楽事典

＜チューバ＞　腹わたにしみ入る楽器。この音は耳で聞くよりも、床の振動を足で感じた方がよい。しかしウィーンなどではすきっ腹の胃壁の振動によって味わうのが最上の音楽通といわれる。この楽器を吹きすぎると口が疲れ、歯がガクガクして宙に浮きそうになるという。よって宙歯ともいわれる。

＜トロンボーン＞電車のつり革にぶらさがりすぎて左右の腕の長さがちがってしまった人が吹くのに最も適した楽器。

＜オーケストラ＞思い思いの楽器を手にし、あるいは口にくわえ、思い思いのテンポで楽しそうに奏する団体のこと。

＜トランペット＞ペットと略されるのは、この奏者がぺっと唾をはくからに外ならない。唾の浸蝕作用で歯がするどくなるので、竦歯（ラッパ）と呼ばれることもしばしばある。



新交響楽団（アマチュア・オーケストラ）

音楽の楽しみ方、接し方にはいろいろありますが、新交響楽団は、楽器を大勢の仲間と演奏することにかえがたい喜びを見出しているいわゆるアマチュアの集ります。

オーケストラの中で奏くことはしかし、自らが楽しむだけでは不充分だと私達は考えています。より多くの方々に演奏を聴いて頂くことが、団員のはげみになり、更に多くの人々が聴きにきて下さるようになることが新交響楽団の目的なのです。そのために、演奏会のたびに団員に課せられるノルマは絶対必要なことと考えられています。いつの日か、いつも満員の聴衆を前に演奏できるようになることを夢見て団員は頑張っています。

新交響楽団は昭和31年芥川也寸志氏を中心として発足以来、音楽鑑賞組織内のオーケストラとして成長しましたが41年に独立して以降、どこからの援助を受けずに月々の団費と演奏会の収益のみによってまかなわれています。その間団員のいれ替りが思いのほか激しいことがアマチュアオーケストラの運営のむつかしさを物語っています。

これまでは上手なメンバーが増えることによってオーケストラの技術も向上してきた面もありますが、オーケストラの技術はメンバーの交替という次元でなく、技術を越えたアンサンブルによって評価されるとすれば、これからはアンサンブルの向上をめざさねばなりますまい。

アマチュアはある意味（常に自発的であり音楽以外の要素がない）でプロより音楽の楽しみ方で、又その表現する感動に於て数段有利な位置にあるということが言われます。ともすれば、これをかくれみのとして好き勝手をすることがアマチュアであると考えられているようですが絶対そうあってはならないとも考えています。

最近の主な演奏会

1973年

11月5日　第26回定期演奏　　中野・サンプラザホール
交響曲第4番「イタリア」＝メンデルスゾーン、ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」＝モーツァルト（独奏：小栗豊）、舞踊組曲「火の鳥」＝ストラビンスキー

12月10・21日　第九特別演奏会　　サンプラザホール
“前奏曲とイゾルデの愛の死”＝ワーグナー、交響曲第9番「合唱付」＝ベートーヴェン

12月25日　第九依頼演奏会　　サンプラザホール
交響曲第9番＝ベートーヴェン　（指揮：小林研一郎）

1974年3月31日　第27回定期演奏会　　東京文化会館
交響曲第35番「ハフナー」＝モーツァルト、牧神の午後への前奏曲＝ドビュッシー、交響曲第5番＝ショスタコービッチ

5月17日　名曲コンサート　　杉並公会堂
「ローマの謝肉祭」序曲＝ベルリオーズ、ピアノ協奏曲第4番＝ベートーベン（ピアノ：弘中孝）、交響曲第8番＝ドボルザーク

6月2日　六大学混声合唱連盟定期賛助　東京文化会館
レクイエム（1, 2, 4, 7）＝ヴェルディ（指揮：小林研一郎）

8月10日　サマーコンサート　　東京文化会館
25日　サマーコンサート　　神奈川県立音楽堂
舞踊組曲「ガイーヌ」より＝ハチャトリアン、カルメン第1組曲・ファランドール＝ビゼー、舞踊音楽「白鳥の湖」より＝チャイコフスキー

10月14日　合唱団“鯨”演奏会賛助　　日比谷公会堂
未完成オラトリオ「クリストス」＝メンデルスゾーン金管楽器と混声合唱のためのマニフィカート＝シュレーダー、テ・デウム＝ヴェルディ（指揮：中村健）

（指揮は特記以外　芥川也志）

新響・団員募集中！　（特にヴァイオリン、チェロ奏者を求む）

入団希望者に対しては原則として、月の最終日曜日の午後、オーディションを行ない、新響のレベル、パート人員の必要度、本人の環境、入団意志などを考慮して決定します。
オーディションは、課題曲(下記)、自由曲、初見のアンサンブル曲を演奏していただきます。

〔課題曲〕

Vn	モーツァルト	協奏曲第5第1楽章	
Vla	エックレス	ソナタ	第2楽章
Vc	ヴィヴァルディ	ソナタ第5第2楽章	
Cb	カプッツィ	協奏曲	第1楽章
Fl	モーツァルト	協奏曲二長第1楽章	
Ob	ヘンデル	ソナタ第1第1楽章	
Cl	ウェーバー	小協奏曲	第1楽章
Fg	モーツァルト	協奏曲	第1楽章
Hr	モーツァルト	協奏曲第3第1楽章	
Tp	ハイドン	協奏曲	第2楽章
Tb	R.コルサコフ	協奏曲	第1,2楽章
Tub	ワーグナー	マイスタージンガー	

（楽譜のない方はコピーをお貸します）

〔オーディション日程〕
12月22日(日)　午後1時
1月26日(日)　午後1時
2月23日(日)　午後1時

〔問合せ先〕
① 団員をご存知の方は団員を通して。
② それ以外の方は人事担当の橋谷幸男まで。
自宅332-4075，会社563-4451内292（キグナス石油 営業計画課）

〔申込先・オーディション場所〕
〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル　**新交響楽団** TEL 357-5255
国電信濃町と地下鉄四谷三丁目の丁度中間、どちらからも徒歩6分、2つ目の信号、八百屋裏CPA学院のビル4F

新響維持会員募集中!!

音楽を愛する大勢の方々の支持のもとに演奏活動が行なわれることがこれからのオーケストラ活動のあり方と信じ、維持会員制度を発足させました。▶年額1口(1200円)以上、▶今後1年間ご案内をさしあげる2回の演奏会に自由にご入場なれます。▶定期演奏会プログラムにご芳名を掲載します。▶ご来場の方にはプログラム贈呈。▶その他新響の全ての演奏会入場券が優先的に1割引で購入できます。▶住所・氏名・年令・職業明記の上現金書留で下記迄。(維持会員申込と付記)

〒160 新宿区須賀町14大湊ビル 郵便振替口座 東京177071
新交響楽団 357-5255

新響登録会員募集中!!

▶演奏会の案内を往復ハガキで毎回お送りしますので、入場券ご希望の時お申込みください。
▶プログラムを無料でさしあげます。
▶申込は1年分として10円切手 100円同封の上、住所(TEL)、氏名、年令、職業明記の上、下記事務所まで。

(オーケストラの名曲800選)リスト頒賦中

音楽鑑賞、レコード蒐集の手引に、古今の無数の管弦楽曲の中から 800曲を選び、索引、演奏時間を付記。申込は左記事務所迄。140円(20円切手可)

器楽合奏を愛する人々の連絡組織APA(エイパ)に入会しませんか！

ＡＰＡは器楽合奏を愛する多くの方々を会員とし、名簿を発行することによって、思いがけない近くに同好の志のいることを知ったり、不足のパートを補ったりすることを目的として、去る6月に設立されました。現在550人の会員は首都圏に450人が集中していますので、どうしても東京中心になってしまいますが、だんだん地方にもその輪は広がって行くことでしょう。

400人の会員を掲載した名簿も発行されて、小さなアンサンブルが各家庭で行われるようになりました。会員は70才以上の人から16才の高校生まで、主婦から社長さんまでさまざまです。

公開レッスンや、地域の合奏会なども企画されています。

入会金は1000円、会費は年2000円です。申込パンフレットは、お茶の水下倉楽器、渋谷ネロ楽器、後楽園チャキ弦楽器にあります。



日本アマチュア演奏家協会（略称 APA）設立準備会
Amateur Players' Association, JAPAN

〒167 杉並区荻窪3-13-15 東荻窪マンション413号
TEL 391-9186(井上)　0424-73-7904(太田)